

親鸞聖人の
手紙から

尾畑 文正

東本願寺

はじめに

〇〇四

—宗祖親鸞聖人に遇う—

自己絶対化を問う

〇一〇

御消息集（善性本）第二通から

念仏者の生活

〇一六

御消息集（広本）第七通から

現在に立つ

〇二二

末燈鈔第一通から

「我と我が世界」を問う

〇二八

御消息集（広本）第一通から

本願を生きる

〇三四

御消息集（広本）第五通から

死において生を問う

〇四〇

末燈鈔第六通から

人間よ、同朋たれ！

〇四六

御消息集（広本）第二通から

新しい生活を賜る

〇五二

御消息集（広本）第三通から

世のいのりにこころいれて

〇五八

御消息集（広本）第七通から

闇を知る

〇六四

御消息集（広本）第三通から

愚者に帰る

〇七〇

末燈鈔第六通から

誓願と名号

〇七六

末燈鈔第九通から

真実に背くもの

〇八二

御消息集（広本）第十通から

世界を開く

〇八八

御消息集（広本）第十二通から

賢さの欺瞞

〇九四

親鸞聖人血脈文集第一通から

さらわず、えらばず、へだてず

一〇〇

親鸞聖人血脈文集第一通から

浄土を生きる

一〇六

御消息集（善性本）第五通から

ただ仏の呼びかけに聞く

一一二

御消息集（広本）第六通から

足もとを見据える

一一八

御消息集（広本）第九通から

悲しみは、いま、世界を開く

一二四

御消息集（広本）第九通から

浄土でまぢまいらせそうろう

一三〇

末燈鈔第十二通から

はじめに

私たちはいまどのような時代と社会を生きているのでしょうか。昨年（二〇〇八年）のアメリカに端を發した金融危機による世界同時不況。いまだに止むことのない戦争。暴力の応酬という言葉では片づけられない弱肉強食的紛争。そういう世界の真ただ中にある

— 宗祖親鸞聖人に遇う —

日本。少子高齢社会、格差社会、年間三万五千人ともいわれる自死者。それら時代と社会の歪みと不正と矛盾に充ち満ちた「いま」「ここ」に誰でもない「私」が生きています。

その生きる現場を直視すれば誰もが身をすくめるほどの状況です。それにもか

かわらず、虚飾きよしやくのイルミネーションに眼奪まなごわれて安閑あんかんと過あやごしてしま
す。しかし、人は虚飾きよしやくの中で活いき活ききと生いきられない。だからこそ様々
な形をとって真実に生きたい心がうごめくのです。時として暴発する事
件の背景にはそんな精神がうずくまっています。閉ざされた時代と社会
そのものから現実に立ち上がり、人間を取り戻すことが求められていま
す。

いま私たちは宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌ごえんきをむかえようとしていま
す。宗祖とは私たちの根源的課題しゆう（宗）を明らかにされた方そ（祖）で
す。私たちに先立って現実に立ち上がる世界を求め、その世界を生きた
人です。その宗祖の法要をむかえるとは、宗祖を単に偉人として高い壇
上に掲げてお祀りまつすることではありません。激動の時代と社会を生きた
宗祖に出遇い、その根源的課題しゆう（宗）に学び、それをわが身に生きるこ
とが問われているのです。宗祖に出遇うとは、宗祖の課題に出遇うこと
です。そこに自分の課題を見いだすことです。

親鸞聖人は平安末期から鎌倉時代、公家社会から武家社会に大きく時
代が移る変革期の日本を生きたられました。その日本を「片州濁世へんしゆじやくせ」と
も「粟散片州ぞくさん」とも記しています。その「片州濁世へんしゆじやくせのともがら」（高僧
和讃わさん）に、ただひとすじに念仏申して、その現実に立ち上がる道を、そ
れこそ懇切丁寧こんせつていねいに書き記した著述が「御消息ごしようそく」という名で呼ばれてい
るお手紙です。その多くは晩年に関東の地でご縁を結んだ「念仏者達」

に対し、当時起きていた信仰問題について書かれたものです。

念仏者の社会倫理に関わる発言もいくつかあり、混迷する現代に念仏者として生きるとはどういうことなのか、このお手紙に託された親鸞聖人の本願の世界に向き合う精神にぜひとも学びたいものです。

現在、親鸞聖人の「御消息」として残されているものは、親鸞聖人のご真蹟（自筆）が十一通、顕智の書写二通。その他、門弟らによって編纂された書簡集が、善性本『御消息集』七通、『親鸞聖人御消息集』（広本）十八通、『五卷書』五通、『末燈鈔』二十二通があります。もちろん、これらは重複するものもあり、それらを整理すると総数四十三通です。学者によっては四十二通と数える場合もあります。

本書ではこれらのお手紙の中から、現代を生きる私たちに呼びかけられている親鸞聖人の時空を超えたメッセージを、時代社会の現実を身を据えて聴聞していききたいと考えています。

如^{にょ} 来の誓願^{らゐせいがん}には義なきを義とすとは、大師聖人の
仰せに候いき。

御消息集（善性本）第二通 真宗聖典五八九頁

自己絶対化を問う

親鸞聖人は一一七三年に
京都で誕生されました。時
代が大きく変わる転換期で
す。出家は九歳でした。そ
の動機は詳しくはわかりま
せん。しかし、生きていく
苦しみ、悲しみ、さらには
不安に満ちた人と人の世に
押し出されるようにしてそ
の求道^{きゅうどう}は始まりました。

現実のただ中で発起されてきた問いを抱えての歩みでした。

親鸞聖人が時代社会の中でうめきながら道を求めていたことは、十九歳（一一九一年）の時、磯長の聖徳太子廟への参籠によって知ることができます。源頼朝が幕府を開く前年です。その御廟で「日域は大乗相応の地なり」という夢告を受けます。それは親鸞聖人が抱えていた「本当の大乗仏教をわが身に明らかにしたい」という願いが夢告として現れたのでしよう。

このような親鸞聖人の求道に応えたのが、このお手紙でいわれる「大師聖人」こと法然上人です。法然上人はその著「選択集」で「称名念佛はこれかの仏の本願の行なり」と記し、念佛は私の行ではない、

阿弥陀如来の本願の行だと言いつつた方です。法然上人との出遇いによつて親鸞聖人は「雑行を棄てて本願に帰す」（『教行信証』化身土巻）生活を歩んでいかれます。

如来の本願とは一切の衆生を平等に救いたいという願いです。それが実現しなければ自分も救われなれないという誓いです。如来の誓願ともいわれます。その如来の本願を根拠にする生活が「本願に帰す」と表されています。それは本願に照らされて自らの「雑行」的生活を見つめ続けていく歩みの始まりです。

それでは雑行とは何でしょうか。端的にいつて、それは人間の自己関心に基づく行為の全てです。どんなにすばらしい行為も、「私が」とい

う自己関心が雑まざれば全てそれは雑行となります。どんなにすばらしい「經典」を読んでも、阿弥陀仏を拝んでも、自分の都合で読み拝むなら、それは雑行です。

雑行を棄てるとは自己中心的分別心ぶんべつしんを問い続けるということです。私たちの生活は実に自己中心的な是非善悪の分別心において成り立っています。それは自分という分別の基準（ものさし）を立てて、それに合えば是とし、善とし、義とします。それに合わなければ非とし、悪とし、不義とします。具体的にいえば、自分の思想、主義、主張、感性、さらには自分の国籍、民族、人種、それらを是とし、善とし、義とします。自分に合わないものは非とし、悪とし、不義として、それらを排除し差別します。その結果、非常に狭い独断的で閉鎖的な世界を生きることに なります。

その実例はいくつもあります。いじめ問題も、部落差別も、民族差別も、性差別も、それこそ自らを正義とし、他を不義とする発想が根本にあります。そういう私どもの自己絶対化する生き方（それこそが義なきといわれる場合の〈義〉です）に、いわば、それでいいのかと問いかけるはたらきが如来の本願です。その根源からの問いかけに立ち続ける生き方（それこそが義なきを義とすといわれる場合の〈義〉です）を親鸞聖人は法然上人に学ばれたのです。それがいま「如来の誓願には義なきを義とすとは、大師聖人の仰せに候いき」と記されているのです。